

# 登校困難状態の誘発因子と教育改革

## Inducers of Difficulties Attending School And Educational Evolution

著者：中村道彦

児童期の子ども達には発達上の大きな課題があり、その達成のために子ども達自身の努力や子どもを囲む家族・教育機関・地域等の支援も重要になります。特にわが国では子ども達の“不登校／ひきこもり”、“いじめ／暴力”、“自傷／自殺”などが社会問題になるほど深刻になっており、さらにこの事態は子ども達の健全な成長をゆがめ、挙句の果てに社会の不健全化を促すのみならず、若者の自由な発想と挑戦への勇気や情熱を損ない、独創的な生産活動も滞り、わが国の国際的な評価にも暗い影を落としかねない重大な問題であることは疑いようありません。

そこで上記の問題の中でも、殊に中心的な問題である“不登校”に焦点を絞り、その背景にある誘発因子の特徴を考え、成績至上主義を醸し出す教育制度が“不登校”を増悪させていることを考察しようと思います。さらに本論における新たな教育制度の提言によって、子どもたちが自由でのびやかな成長を果たし、子ども達を見守る家族や社会がさらに豊かな養育環境を実現できるための一助になれば幸甚です。

本論は以下の章で構成されています。

第1章：**登校困難状態の現状**。著者が20年以上にわたり携わってきた“不登校”問題を振り返り、日本における現状を紹介します。殊に最後の11年間は登校困難状態にある子ども達の診療にあたり、約1000人の子ども達の医療的な関りで体験した登校困難の特色について分析を試みたいと思います。

なお、本論における**登校困難状態** status of Difficulties Attending School (DAS) の定義と分類は以下のとおりです。登校困難とは「子どもは、登校の意思があるなしに関わらず、登校することに強い抵抗感を覚えているが、家族・教育機関・地域は子どもが登校することを希望しており、この葛藤から子どもと家族の間に確執が生まれ、不安抑うつ、身体化、ひきこもり、自傷自殺行動、反社会的行動などをきたし、このことが登校困難を一層悪化させるような悪循環の状態」と定義しておきます。なお、子どもや家族の身体病や精神病、虐待や暴力、登校手段等の問題、養育環境における経済的問題、社会的偏見などによる登校困

難も含めます。ただし身体病や精神病については特に注意が必要です。例えば身体病に思えても心理的な葛藤による身体化現象であることもあり、一方、抑うつ状態が内分泌疾患による部分症状であることもあります。従ってこの評価には心療内科医や精神科医による判断が必要で、登校困難状態をきたした子ども達は原則として医療による診察を受けておくことが望ましいと思われれます。最近、子どもや家族の否認的指向や教育機関の過敏なほどの配慮から、登校困難の発生要因から精神障害を排除し、心理社会的な問題として独断的に取り込む傾向のあることを危惧しています。

登校困難状態の分類として、(1)登校・登園(以降は登校とのみ標記する)しぶり *reluctant school attendance*、(2)不規則登校 *irregular school attendance*、(3)別室登校 *ectopic or off-class attendance*、(4)登校拒否(不登校を含む) *refusal school attendance*、(5)混合状態 *mixed state*、などを想定しています。登校しぶりは“不登校”の前兆になることがあります。幼年期や児童期初期では一過性に終わることもあります。登校時にぐずり、親とすったもんだした挙句にしぶしぶ登校し、登校するとそれなりに楽しく過ごしていることもあります。子ども分離不安が背景にあることも少なくありません。不規則登校は“不登校”の初期に見られるもので、夏休みなどの長期の休暇明けに、突然のように学校を休み、親は驚きと怒りで必死に登校を促し、子どもは葛藤しながら登校し、無理な登校でたまる疲れを解消するかのように時々学校を休む状態になります。反復する親の登校刺激に子ども達は耐性をつくり、さらに親の無理解と威圧的な態度に反発心も募り、学校を休む日数や遅刻早退の頻度が増えてくることになります。無理に登校しているため登校しても教室に入れず、保健室などで過ごすようになる別室登校もみられますが、長時間頻回に保健室を利用するようになると保健室機能を制限するため学校側も好ましいこととは考えず、学校によっては会議室など空いている部屋を“ふれあい教室”等の名称で登校困難などの学生用に別室を準備して、補助教員などを配置することがあります。

登校拒否は“完全不登校または**慢性的長期欠席** *chronic absenteeism*”に相当しますが、その実態は様々です。例えば、登校拒否は、本人が登校すべきと理解していても、あるいは親が登校を願っていることを本人が理解していても、本人に登校の意思のない場合があります。親が「学校に行きたくないの」と聞くと子どもは「行きたい」と答えることがあり、この「行きたい」は意思ではなく規範を現わしています。文科省の規定では年間30日以上欠席する場合を不登校と定義していますが、この期限の設定は不登校の実態を曖昧にして、その対策を操作的にする可能性があります。従って不登校を日数によって規定することはあくまで便宜的であって、その実態を把握する上では望ましくないとはいえます。本人が登校意思を喪失している場合を登校拒否とする場合には、登校しない期間が1週

間であっても 1 ヶ月であっても登校拒否に分類することになると考えてもよいかもしれません。不規則登校の場合では折々に登校しているため登校の意思はあるとみなすことができます。

登校困難状態という定義の下に、著者の経験してきた診療記録から登校困難状態の特色や背景因子を明らかにしたいと思います。

第 2 章：**登校困難の成立過程**を考察します。登校困難要因の分析結果から子ども自身や、さらにその背景にある家族や学校の特色を明らかにします。成績至上主義の教育環境で子ども達の心に形成される学習や学校環境への嫌悪感、親同士間に生じる高等教育や有名大学への競合、親子の不安に便乗した教育産業の台頭、学生を集めるために遊園地化を進める大学の目論見的運営、文部官僚の天下り先として拡充する教育関係機関、などが子どもの教育をいびつにしている背景にあることを考察します。

第 3 章：**登校困難を克服**するための提言をしたいと思います。登校困難状態の背景に、個人的要因、家族・家庭的要因、学校教育機能的要因、地域・社会的要因、教育政策的要因など多種多様な要因が重層的に関与しているため、登校困難を克服することは決して容易なことではありません。しかし容易ではないと言って手をこまねていることは、登校困難問題を看過してきた現状に通じることになりますし、個人レベルの問題のみに目を向けることで登校困難の背景にある重大な社会的・教育制度的な問題から目をそらせることになりかねません。そこで、それぞれの要因について改善すべき課題をあげ、その課題に向けて可能なことから解決の道を模索することであろうと思います。克服の道のりは長くなるでしょうから、多くの人や組織の知識と経験をもとに協働できることが必要になります。そのために教育についてのコンセンサスを築く努力から始めるべきでしょう。努力の道標になるべく課題の整理と対策に向けた合意形成の基礎資料に、本論が役立つことを願っています。

## 第 1 章

2011 年 9 月 5 日にメンタルクリニック・ラッコリンを開院し、約 3,000 名近い患者さんに利用していただきました。殊に登校困難な状態(いわゆる「不登校」)にある子ども達と母親の苦悩は大きいにもかかわらず、登校困難を専門にする精神科・心療内科の診療施設は少ないため、ラッコリンは登校困難を軸にして子どもと女性に特化した診療施設を目指すことにしました。診療は登校困難状態

にある子ども達に限定していたわけではありませんが、受診理由の多くが登校困難で、その背景には対人緊張や発達障害などが見え隠れしていました。

2022年11月16日にラッコリンを閉院しましたが、この間に来院された初診時年齢18歳以下の子ども達は971名[ここでは**ラッコリン若年受診者群**と呼んでおきます]になりました。性別では男性が354名(36.5%)と女性が617名(63.5%)、年齢別では小学校年齢(6~12歳)が214名(22.0%)、中学年年齢(13~15歳)が414名(42.6%)、高等学校年齢(16~18歳)が343名(35.3%)でした。ラッコリンでは子どもと女性を対象にしていたため、子どもでも女性が多くなる影響があると思われます。また、初診時年齢では中学生年齢が最も多く、発達過程でも中学時代が精神的にも不安定なりやすく、結果として受診も増える傾向があるのかもしれませんが。小学生が少ないのは、年齢別人口率が少子化に伴って減少していることも考えられます。一方、親の立場から考えますと、小学校の子どもに心療内科・精神科を受診させることに躊躇があると思われるので、このことも小学校児童が少なくなる要因と考えられます。

誕生月では、2月と4月が最多で102名(10.5%)、次いで11月の95名(9.8%)、3位が1月88名(9.1%)で、最少は3月の62名(6.4%)でした。Fromport.comのデータによりますと、2016年では出生の多い月は最多が9月、2位が7・8月、3位が6月でした。一方、出生の最少月は12月でした。もともと出生月は年度によって順位は変動し、その差は僅少で、実質的には特別な出生月は存在しないと考えられています。登校困難群の出生月は11月~4月の冬季に多い傾向がありましたが、冬生まれの子ども達が児童青年期になってメンタルの問題を持ちやすいということにはなりません。しかしこの子たちは早生まれとなるため、成長のより早い段階で小学校に入学することとなります。言い換えればこの子たちは成長のより早い時期に母子の分離を体験していることとなります。この差は1年にも満たない差ですが、子供の成長が大人以上に速いことを考慮することは必要かもしれません。いづれにしても早生まれの子どもに登校困難が起りやすいという傾向が存在するのか、存在するとすればどんな要因によってそうなるのかを検討する必要があると思われます。

初診月は最多が10月で105名(10.8%)、次いで6月の104名(10.7%)、7月の99名(10.2%)で、最も少ない月は8月の59名(6.1%)でした。初診月の特徴としては、1位と2位となった10月と6月は、夏休み明け1~2ヵ月後と入学や進級の1~2ヶ月後に相当しており、この1~2ヵ月間の休暇後ラグが何を意味するかを考えてみる必要があります。入学・進級後や夏休み明けは、過剰な負荷を伴う受験や宿題で子ども達は疲弊しており、新学期を迎えることが子ども達のストレスを増大させています。登校することに強い抵抗を自覚しており、登校困難の始まるのもこの時期になります。登校困難によるストレス反応として頭

痛や腹痛などの身体症状や倦怠感や睡眠相遅延(夜更し朝寝坊)などを子ども達は訴えることがあります。本人も家族もその原因が分からず、親子の確執を作りながら様子見をしている期間が1~2ヵ月の休暇後ラグになっている可能性があります。あるいは身体症状のため、小児科や内科を受診して「起立性調節障害」などの診断の下に薬物治療を試み、その効果が思わしくないために転院を模索している期間かもしれません。さらに親子ともども否認によって、登校困難の背後にある精神的な問題と直面することを回避している不問の期間かもしれません。どのような要因があるにしても、このラグによって治療の開始が遅れ、登校困難が進展し、子ども達が登校しないことで失うものの大きさを考えると、このラグを如何にして減少させるかが課題になります。そこで、**新しい環境への暴露後に登校困難が発現し、1~2ヵ月間のラグを置いてから受診する背景にどのような要因があるのかを検討する必要があります。**

ラッコリン若年受診者群 971 名の中で、登校困難状態で初診をしたものは 654 名 (67.4%) [ここでは**登校困難群**と呼んでおきます] でした。残り 317 名 (32.6%) [ここでは**非登校困難群**と呼んでおきます] は登校困難状態ではありませんでした。先に定義しましたように、登校困難状態は「不登校」を含むだけでなく、登校を困難に感じている状態をすべて含んでいます。ここで敢えて「不登校」の子ども達と限定しないのは、登校困難状態は時期によって変化するからです。ある時期では完全な登校拒否状態でも別の時期には、登校しぶりや不規則登校であるため、「不登校」と一義的に決めることは悉無論に陥り「不登校」でなければ問題ないといった、誤った視点の理解を促す可能性があります。ラッコリン若年受診者群の約 2/3 が何らかの登校困難状態でしたが、子どもの 2/3 が登校困難状態ということではありません。私たちのクリニックが子どもと女性に特化した診療を行い、殊に限定していたわけではありませんが「不登校」で悩まれている子どもや家族が多く来診されていたためと思われまます。▲

登校困難群における男女別頻度は、男性が 213 名 (32.6%)、女性が 441 名 (67.4%) で男女比は 0.48 でした。女性の多いことは、ラッコリンが子どもと女性に特化した診療をしていたという要因が考えられますが、非登校困難群では、男性 141 名 (44.5%) と女性 175 名 (55.2%) で、男女比は 0.81 でした。このことは登校困難群の女性優位性は受診者バイアスによるだけの問題ではないことを示していました。すなわち登校困難群ではクリニックの受診応需特性以外の要因があるように思われます。すなわち、**女性の方が、①登校困難になりやすい、②受診に否定的な感情が少ない、③ジェンダーの相違、例えば女性の方が真面目に登校するものと受け止められており、登校困難になると家族が敏感に反応する、などを検討する必要があると思われまます。**

登校困難群の年齢別頻度では、初診時に小学校年齢(6~12歳)の子どもは 116

名(17.7%)、中学校年齢(13~15歳)の子どもは306名(46.8%)、高等学校年齢(16~18歳)の子どもは232名(35.5%)でした。一方、非登校困難群では、小学校年齢の子どもは98名(30.9%)、中学校年齢の子どもは108名(34.1%)、高等学校年齢の子どもは111名(35.0%)で、学校種別では小中高間で受診者の軽度増加はありますが、30~35%の範囲で大差はありませんでした。登校困難群における中学校年齢の子どもの増加は受診者の年齢特性に影響されたものではないと思われました。参考までに、ラッコリン開業期間の2011~2022年における文科省の学校別・年度別の不登校児・生徒の頻度から学校別の不登校の割合を概算すると、小学校10.93%、中学60.29%、高校28.78%でした。登校困難群と文科省の頻度の相違は、登校困難と不登校の相違を反映している可能性があります。すなわち、小学児童と高校生では登校拒否以外のより軽度の登校困難が多く、そのため登校困難群の小学校年齢と高等学校年齢の頻度が文科省統計よりも高くなっている可能性があります。一方、中学校年齢では登校拒否が増えていることを反映して文科省のデータは増加していると思われます。**中学校年齢の子どもの精神的な不安定さが登校困難を増加させている可能性があります、この年齢のどのような要因が影響しているのかを検討する必要があります。**

登校困難群の学校種別・男女別頻度は、小学校年齢では男性59名(50.9%)と女性57名(49.1%)で男女比1.04、中学校年齢では男性89名(29.1%)と女性217名(70.9%)で男女比0.41、高等学校年齢では男性65名(28.0%)と女性167名(72.0%)で男女比0.39でした。小学校年齢では男女ほぼ同頻度でしたが、中高校年齢では女性の割合が多くなっていました。一方、非登校困難群では、小学校年齢の男性61名(62.2%)と女性37名(37.8%)で男女比1.65、中学校年齢の男性40名(37.0%)と女性68名(63.0%)で男女比0.59、高等学校年齢の男性40名(36.0%)と女性71名(64.0%)で男女比0.56でした。登校困難群と同様に、中高校で女性が男性よりも多い傾向を示しましたが、登校困難群の男女比が0.5以下であるのに比べ、その比は0.5以上でした。年齢の増加に伴い登校困難の女性優位性が認められると思われました。しかし男女別に検討した調査はあまりなく、小中校ではほぼ男女が同数で推移し、高校になると一部の自治体の調査では女性が多くなると言われています。**登校困難群の結果は、受診応需特性を考慮しても、少なくとも年長になるにつれて登校困難は女性に多くなる傾向がみられ、この女性優位性の要因は何かを検討する必要があると思われます。**

これまでの結果から次の課題が浮かび上がってきました。

- (1) 冬生まれの子どもに登校困難の頻度が高くなるのはなぜか？
- (2) 新環境曝露で登校困難が発現してから受診までに1~2カ月間のラグがあるのはなぜか？
- (3) 中学生の登校困難の頻度が高いのはなぜか？

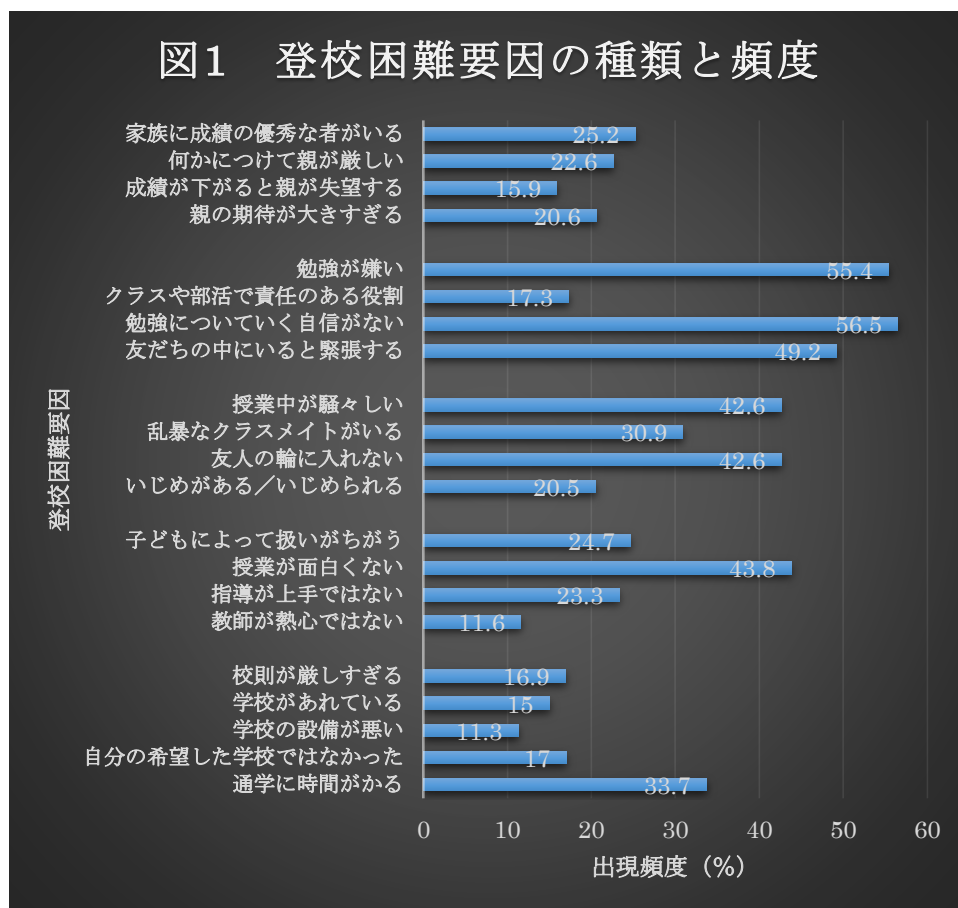
(4) 女性は小・中・高校と学年が上がるにつれて登校困難の頻度が高くなるのはなぜか？

登校困難群における登校困難要因について検討したいと思います。表 1 は初診時に登校困難がみられた 18 歳以下の子どもたちに実施した「登校困難要因調査票」です。調査票の記入は家族に相談せずに子ども本人にお願いしました。登校困難群 654 名のうち 250 名(男子 75 名、女子 175 名)の方[ここでは**調査票実施群**と呼んでおきます]に実施しました。回答は 1~4 の中で 1 つを選んでいただきました。回答 1 は「あてはまる」、回答 2 は「すこしあてはまる」、回答 3 は「あまりあてはまらない」、回答 4 は「あてはまらない」でした。登校困難要因は 5 つのカテゴリーに分けられています。「学校」は学校に関する要因、「教師」は教師に関する要因、「クラスメイト」は学校内での友人関係に関する要因、「自分」は自分自身に関する要因、「家族」は家族に関する要因です。記述されていない要因については「その他」に記入してもらっていました。「その他」に記入した子どもは 54 名でした。この項目の結果については後程示したいと思います。

表 1 登校困難要因調査票

要 因		1	2	3	4
学校	通学にかかる(片道 分)				
	自分の希望した学校ではなかった				
	学校の設備が悪い				
	学校が荒れている				
	校則が厳しすぎる				
	その他( )				
教師	教師が熱心ではない				
	指導が上手ではない				
	授業が面白くない				
	子どもによって扱いがちがう				
	その他( )				
クラスメイト	いじめがある／いじめられる				
	友人の輪に入れない				
	乱暴なクラスメイトがいる				
	授業中が騒々しい				
	その他( )				
自分	友だちの中にいると緊張する				
	勉強についていく自信がない				
	クラスや部活で責任のある役割を担っている				
	勉強が嫌い				
	その他( )				
家族	親の期待が大きすぎる				
	成績が下がると親が失望する				
	何かにつけて親が厳しい				
	家族に成績の優秀な者がいる				
	その他( )				

回答の中で「その他」を除く各項目の反応頻度は図1のようになりました。ここでは回答1の「あてはまる」と回答2の「すこしあてはまる」を併せて要因の存在を肯定した反応と理解し、一方、回答3+4は否定反応として扱いました。図1には各要因の肯定的な反応頻度を示しています。なお、表では困難要因の順番が下から上になっています。



最下段の要因グループが「学校」に関するものです。この中で最頻度の反応は通学時間で、**通学時のアクセス利便性の問題**は世界的に大きな課題になっています。特に通学時間が長い、頻回に交通機関を乗り継ぎする、朝のラッシュに巻き込まれる、などが子ども達の訴えの代表的なものでした。家族や本人に好ましいと思える学校を希望して時間のかかる通学を無理におこなうことは登校の抑制因子になることがあります。「学校」の2番目は子どもの**希望しない学校**であることで、これにも種々の理由があると思われます。例えば、希望校に入学できる実力が伴わなかった、前校で親しんだ友人が進学する学校を希望したが許されなかった、子どもの成績から希望しない学校を家族や学校が勧めた、などが



あります。第3位は第2位と僅差ですが、**校則の問題**です。服装から持ち物、髪形・髪色、挙句は下着の色まで事細かに校則で規定する学校があります。これほど極端ではなくても、携帯や交友などに制限を加えるなど、子ども達の自由な活動を過剰防衛的に制限する校則も子ども達には不快なものになります。カナダ・バンクーバーの小学校では「〇〇フライデー」という特別な金曜日が時々あり、その金曜日は、例えば「できるだけ色の多い服装をする」とか「奇妙な髪形にしてくる」などの課題が出されます。日本では学校がひっくり返るような課題です。以上の要因が教えることは

- (1) できるだけ通学がしやすく、子どもの希望する学校を選ぶこと
- (2) 懲罰的・過剰防衛的な校則は見直し、できれば子ども達や養育者も加わって校則を考えること

第2のカテゴリーは学校の教師に関する要因です。この中で断トツ第1位は「授業が面白くない」でした。授業はどの世界でもどの時代でも面白いとは言えないものでしょう。この事をはき違えて、授業の中で茶番を演じて面白おかしくするという本末転倒の授業まで出現することになると、もはや笑えなくなります。途上国の子ども達が熱心に勉強をしている姿が報道番組などで紹介されることがありますが、この報道が真実ならば、学校の先生が茶番授業をして子供たちを喜ばせているとは思えません。それは子ども達が学びたいことを学んでいるから熱心に勉強しているのだと思います。子どもの知りたいことを学べるならば、授業は必然的に面白くなります。歴史の授業が面白くないといわれる理由の一つが年表の丸暗記のような勉強をさせられているからと聞くことがあります。意味なく丸暗記することは他の授業でも耐えられるものではありません。歴史は本来、その時代の人々の生きざまが描かれたヒューマン・ドラマですから、戦国ゲーム以上に面白いものです。面白くなれば年代などは勝手についてきます。「面白い授業」とはどのようなものかを再考してみる必要があると思います。第2位は「子どもによって扱いが違う」というものです。教師が意図的に子どもの扱いを分け隔てしているというのであれば言語道断ですが、教師の態度が一部の子供達には差別されているように感じる、あるいは勘違いをさせるのであろうと思います。「えこひいきしているように見える態度」は恐らく無意識的なものであろうと思われませんが、多忙な教師の仕事で時に子どもに十分に対応できなくなっているためかもしれません。一人の教師に何もかも背負わせている日本の教育は子ども達のためにも教師自身のためにもマイナス以外に考えられるものはありません。教師が授業や子どもの対応に専念できるように十分な時間がとれること、教師の複合的な業務を単純化して教師以外の職員を含めて分担できるようにすること、などは緊急の課題であるように思います。現状の教師生活では教師を志す優れた人材は益々不足するようになるのではないでしょ

うか。そして授業を面白おかしくする必要はなく、子ども達に出来るだけ理解できるようにすることです。このために詰め込みの授業ではなく、出来高の授業を評価すべきです。第3位は「先生の指導が上手ではない」とのことです。これは先の第1や第2位の問題にも通じることであろうと思われます。この要因の示すところは以下のようです。

(3) 教員と学生の関係が豊かになるように教師の多忙を改善すること

(4) 授業の在り方を考え直すこと

次の「クラスメイト」のカテゴリーでは、第1位は「友だちの輪に入れない」と「教室が騒々しすぎる」でした。この2つは関連した事項とも、独立した事項とも考えられます。前者では、例えば、仲の良いグループが集まって騒いでいてもその輪の中には入れない、あるいは入りにくいという状況があるとも思われます。関連があるにしてもないにしても、この背景に次のカテゴリーに係る自己評価の問題が隠れていることがあります。また、成長期の子ども、特に女子に同族主義が現れ、同じ考えや価値観を持つ者が結束して、異質なものを排除するという行動がみられるようになります。自己主張の苦手な子どもはグループとの同族性を、本心ではなくても、アピールすることもできず、排除されてしまいます。異種排除の傾向がいじめや差別問題、ひいては人権侵害へと反社会的傾向につながっています。欧米の教育で盛んにおこなわれるのがプレゼンテーションです。大小のグループの中で自分の意見を言うことの大切さや異なる意見に対して敬意を払うことを学ぶことができます。教室の中でグループワークを活発にするため、席の並びも劇場スタイルではなく、もっと自由なレイアウトが必要でしょうし、教師もグループマネジメントに長けていることが望ましいでしょう。第3位の「乱暴なクラスメイトがいる」はまさにいじめの構造であり、先の要因の末路ともいえます。勿論、何らかの障害があるために暴言暴行のある子どもには、家族・教師・心理職・医療職・地域役員などの連携の中で対処していくべきでしょう。

(5) 対人関係を学ぶために教育の早期から自己発言を重視する活動を行うこと

(6) 異種を認め、受け入れ、協調することで互いに向上することの重要性を早期から教育すること

第4カテゴリーの「自分」では第1位が「勉強についていく自信がない」、第2位が「勉強が嫌い」でした。勉強に自信を失っていけば、勉強が嫌いになるのは当然かもしれません。ではどうして勉強が嫌いになるのかを考えてみる必要があります。先に述べましたように、勉強はもとより面白いものではないかもしれませんが、それでも自分の関心のあることを学ぶのであれば自ずと面白くなり、勉強にも自信が持てるようになる可能性が高いと思います。自信を失うの

は勉強の成果を求めるためです。学力は個人の財宝であって、人と比較されるべきものでも、人から押し付けられるものでもありません。自分が面白くて学んでいるのに、その勉強では不十分と水を差され、もっともっとと急き立てられ、その期待に添えない自分を見出した時に自信を維持できるものでしょうか。先ほどの要因にも関わり、詰め込み教育の問題が登校困難を悪化させていると思われます。「詰め込み教育」は成績至上主義の副産物でもあります。そして成績至上主義は学閥や派閥のしからしめるところでもあります。日本の伝統的な制度が作り上げてきたシステムから教育制度が離れていかなければ登校困難の問題は悪化するばかりとなり、やがて国民は活力を奪い、国力も低下することになります。第3位の「友だちの中にいると緊張する」は、友だちの輪に入れないという要因にも関連しています。いわゆる対人緊張の強い状態を示しており、社交技能の育成が不十分という他に、成績至上主義によって自分の人間的評価が試験点数によって決められかねないという不安、成績不良で「落ちこぼれ」の烙印がつく不安、友人・教師・家族・地域からも「できる」「できない」を常に意識させられる不安、など子ども達は自分の評価を過剰に意識する環境にいると思われます。その結果、周囲の目を気にし、登校困難となり、登校しない日が増えるにつれて益々人目が気になるという悪循環が生まれてきます。

(7) 勉強の自信は成績ではなく努力によって自分の中に生まれる「資産」であることを強調すること

(8) 成績至上主義から一人一人の能力を尊重する能力至上主義に変換すること

第5のカテゴリーでは、とびぬけた要因は認められませんが、第1~3位の要因は「家族に成績優秀な者がいる」「親が厳しい」「親の期待が大きすぎる」でした。例えば、同胞に成績の良い子がいると、親は負けじ心をたきつけて子どもに期待を膨らませ、その結果子どもに厳しくなるという構図が見えてきます。同胞とのライバル意識も手伝って益々自分を追い込みますが、うまく結果が出ないと自己評価を下げていきます。そこに親の期待があり、例え親が何も言わなくても、子どもには親の望むことは分かっており、その親に応えられない自分を考えると益々自己評価が下がります。そして登校困難となり、親との確執が高まり、親の無理解を嘆く子どもの気持ちに対して親もプレッシャーを強め、さらに自己評価を下げる、という悪循環が起こります。

(9) 親は子どもの人生を先導することではなく、後方で応援することを自覚すること

(10) 親は子どもを同胞や同級生たちと比較せず子どものあるがままで肯定的に受け止めること

登校困難要因調査票で「その他」に記載した子ども達は 53 名でした。いずれも回答は 1 か 2 で、登校困難にかかわるという反応でした。記載内容は重複するものもありますが、以下に例示します。

### (1) 学校に関する要因

- ・ 通学：学校の坂がしんどい/通学路でクラスメイトが邪魔をする
- ・ 期待：学校からの期待が大きい/プレッシャー
- ・ 恐怖：学校の雰囲気が嫌い/教室が怖い/校舎に入る時グラウンドの前を通らなくてはならない/  
教室がうるさすぎる/恐怖/雰囲気が苦手/人が多すぎる/先生が嫌い
- ・ 多忙：部活が土日もあり休みがない/時間が多いわりに役立たない/課題が多い/  
休みが少なすぎる
- ・ 緊張：他生徒と比べてしまう/クラブの先輩との上下関係/友達が個性的だ/一日中気を遣う/  
先輩からのセクハラ/かなり気をかけてくれる
- ・ 学力：勉強がわからない

学校施設に関する不満はみられません。通学路や学校機能(勉学、共同や協調、活動など)に関する不満がみら

れ、最終的には学校自体が恐怖の対象になっています。特に気がかりな点は子どもの「多忙」です。学校側の要

求が過多になっている可能性があり、子ども達を圧迫して文字通りの学校恐怖に発展させています。

### (2) 教員に関する要因

- ・ 嫌悪：嫌いな人がいる/めんどくさい先生がかなりいる/保健室の先生が苦手/担任が気持ち悪い/  
うざい/苦手な先生がいる/先生と 2 人きりで話す/一部の教師が嫌い/  
授業外でよく話しかけてくる
- ・ 不信：自分の意見が通っていない/担任に不信感抱く/先生のことが信頼できない
- ・ 高圧：生徒に対し馬鹿に言うようなことをいう/めっちゃ怒鳴る人がいる/高圧的に感じる/  
呼び捨てにする/理不尽/急に怒る/先生が大声で怒鳴る
- ・ 強制：課題が多い/勉強を強いられる/いちいち質問をあててくる/進路の話をされる

教員の高圧的な態度や、親しみの表現かも知れませんが子ども達にぞんざいな対応をしてむしろ学生たちに嫌

厭されているようにも思えます。教員と学生には強い信頼関係が必要ですが、この点についても不信感のある子

ども達がいることは大きな不安材料です。不信感を生み出す要因の一つが威圧的・高圧的な態度かも知れません。

### (3) クラスメイトに関する要因

・回避：誰とも顔を見たくない(できれば)/クラスメイトの目が気になる/クラスの中にいるのが怖い/

クラスに馴染めない/ワイワイし過ぎていてしんどい

- ・過敏：じろじろ見られている気がする/盗撮や陰口がある/自分のことを言われていそう/人の噂話がよく聞こえる
- ・攻撃：帰宅後の SNS での攻撃/人を馬鹿にしている
- ・嫌悪：うざい人がある/大嫌いな友達がいる/女子の気が強い/キレて意識が低い子が多い/男子が面倒
- ・劣等：皆勉強している/志が高い
- ・奇行：大声で叫ぶ
- ・相性：性格が合いそうな子が少ない

クラスメイトの中では緊張感が強く、相手の視線や自分に対する評価を気にしており、これが度を過ぎると「う

ざい」とか「しんどい」という気持ちに発展しているように思われます。成績至上主義は他者との競合を活発に

するというのではなく、他者を蔑視できる立場を求める利己的な姿勢を強めるため、人の評価を気にして排他的

で威圧的になるか、回避的で劣等的にしているように思われます。

### (4) 自分に関する要因

- ・緊張：クラスの中にいると緊張する/人が怖い/人前で失敗したくない
- ・自信：自分だけが弱い/自分に自信がない/自己肯定感が低い
- ・評価：自分がどう見られているか/いろいろなことで常に上にいたい/テストが怖い/成績が下がるのが怖い
- ・惰性：一日学校を休んだことで味をしめた/努力ができない
- ・緩慢：物事がテキパキとできない
- ・目的：行く理由が分からない/自分で勉強する方が効果が高い/何のために勉強する方が高い
- ・身体：学校にいると腹痛・吐き気がする/眠たい、めんどくさい
- ・共同：班活動が苦手
- ・社交：コミュニケーションが苦手

自己評価が低く、その結果、自信がなく、自己表現をするコミュニケーションを苦手に感じ、人前で緊張が絶

えない、という状態がみえます。対人緊張が高まると身体的な反応が現れて心理的な葛藤から目をそらすことで

迷宮に落ち込む子供や、あるいは学校における目的意識を喪失して安易な方

向に居直る子どももいるようです。

### (5) 家族に関する要因

- ・ 干渉：過干渉で学校で何が合ったか報告させられていた/うざいほど干渉してくる
- ・ 差別：祖父母(特に祖父)の差別がひどい
- ・ 過大：親が賢すぎる/親が怖い/父が嫌い
- ・ 不和：兄弟喧嘩/親が結婚不安定
- ・ 高圧：圧を感じる/うるさい/プレッシャー/反抗期

家族、殊に親の干渉が子どもを苦しめています。あるいは親や祖父母など、尊大な存在に思え、プレッシャー

を感じ、張り子の権威に反抗的な態度が生まれていると思われます。そして家庭内、殊に両親間の不和が子ども

の心理状態に深く影響をしていることも見落としてはいけません。

登校困難要因の全体的な特徴は、殊にクラスメイトや教員との関わり方、すなわち学校における人間関係がめだちます。通学や施設の物理的な要因は登校困難としては軽度ですが、一方で改善の見込める要因でもあり、困難要因を少しでも減少させるという視点から考慮しておく必要があります。家族との関りでは、家族の過干渉や高圧的な態度が子ども達に登校を控える傾向を強めているように思われます。家族は親の願いに子どもが不反応にみえてますます高圧的になるという悪循環に陥りやすいので、親の方もこの点を意識しておく必要があります。学校や家庭における確執の背景に成績至上主義の影響が見えています。すなわち、家族も教員も子どもの向上を願って意識的または無意識的に圧力をヒートアップさせて、子どもに威圧的な存在となり、さらにクラスメイトの間で自分がどのように映っているのかを常に気にして緊張を緩めることができないという事態を生み出しているように思われます。

次に、登校困難要因の男女別頻度を調べてみました。殊に女子は年齢が高くなるにつれて登校困難が増加する傾向がありましたので、その背景の要因が何かを考えてみたいと思います。なお、調査実施群でもラッコリン若年受診者群における女性高頻性の影響があるため、男女別に各要因の回答百分率を算出して比較しました。

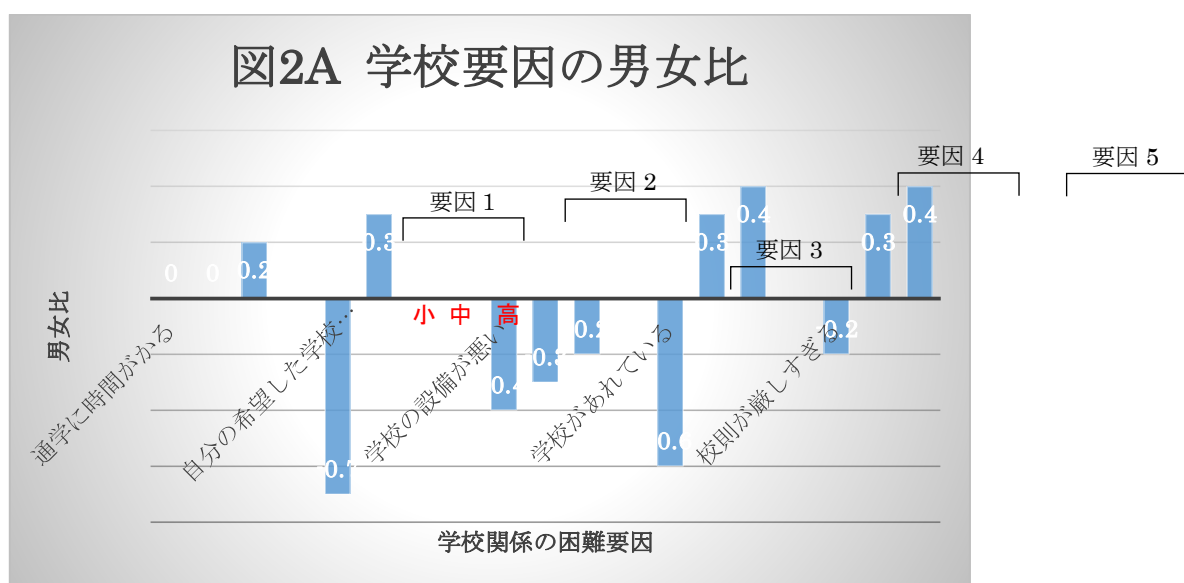


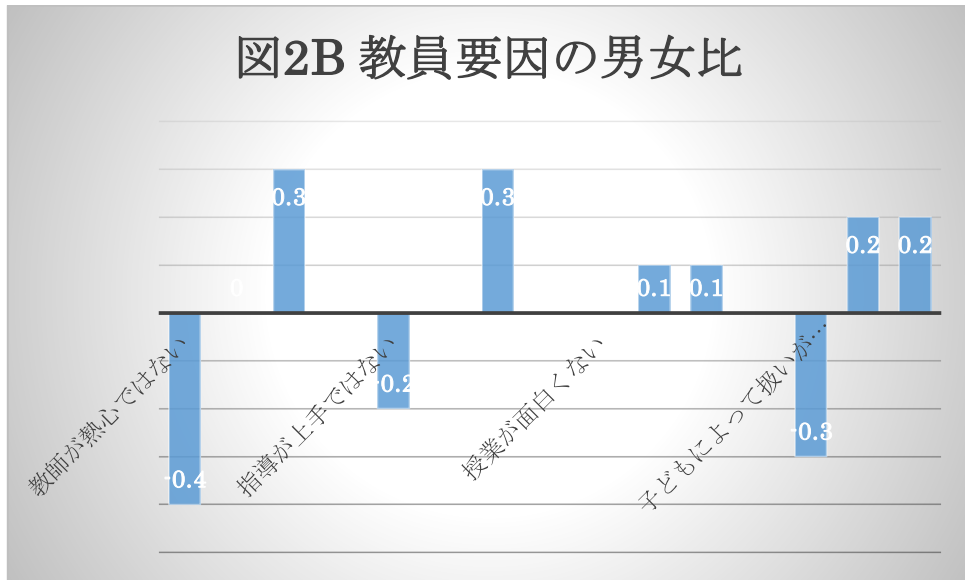
図2Aは学校関係の困難要因における男女比を示しています。男女比は以下の式で算出しています。

$$\text{男女比} = \frac{\text{女子頻度} - \text{男子頻度}}{\text{女子頻度} + \text{男子頻度}}$$

この式で男女比は-1~+1の間の数値で表されます。プラスの時には女子の頻度が高く、マイナスの時には男子頻度が高くなります。すなわち、棒グラフが上向き(プラス)の時には女子頻度が高く、棒グラフが下向き(マイナス)の時は男子頻度が高いことを示しています。また、棒グラフは3本がセットになっており、左から「小」の小学校年齢、「中」の中学校年齢、「高」の高等学校年齢を意味しています。学校の最初の要因「通学に時間がかかる」では、小学校・中学校の比は0、高校の比は0.2を示しています。すなわち、小中学校では男女は同じ頻度で通学の困難さを訴えています。高校になると女子が20%程度多く訴えるようになっていました。学校の要因2は「自分の希望した学校ではない」ですが、小学校では男子が多く訴え、中学になると女子が訴え、高校になると男女ともに訴えるという結果でした。要因3の「学校の設備が悪い」という困難をあげるものは小中高共に男子に多く、校種が上がると共にその割合は減少していました。残りの2要因は、小中高と学年が進むにつれて訴えの中心は男子から女子へと移り、高校では女子に多くなっています。女子が高校になると登校困難が増える傾向にある理由の一つが、教室崩壊や校則の厳しさであろうと思われます。殊に一部の学校では、女子のスカートの丈、茶髪禁止、挙句は下着の色まで決めるといふ、差別的な校則に、女子が辟易している姿が思い浮かびます。

図2Bは教員関係の困難要因にみられる男女比です。

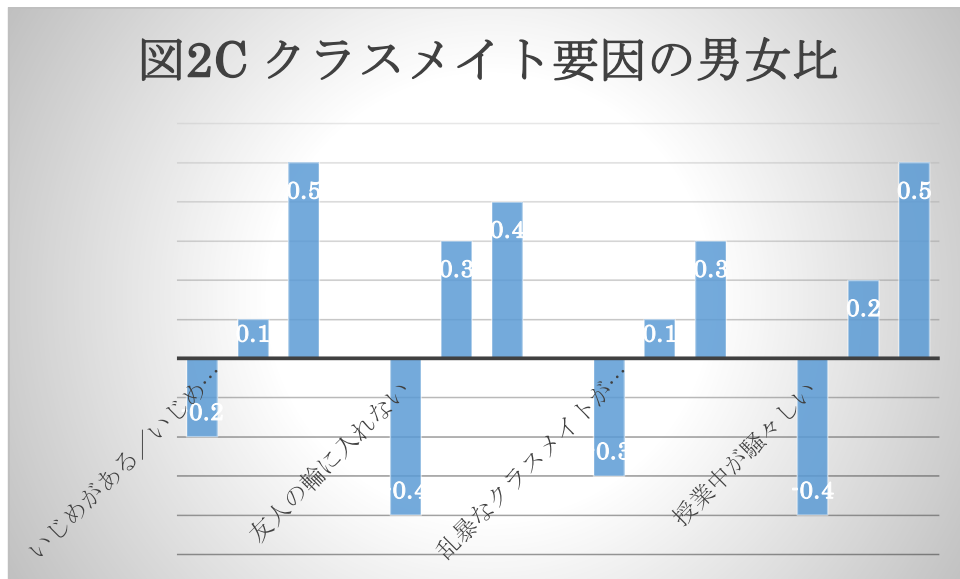
図2B 教員要因の男女比



教師に対する不満は、小学校では男子、高等学校では女子が多くなっています。これも高等学校で女子の登校困難の増える要因の一つでしょうが、男女比は-0.4~+0.3の範囲で大きな男女差はなく、男女ともに実感している要因と言えるかもしれません。

図2Cはクラスメイト関係の登校困難要因の男女比です。

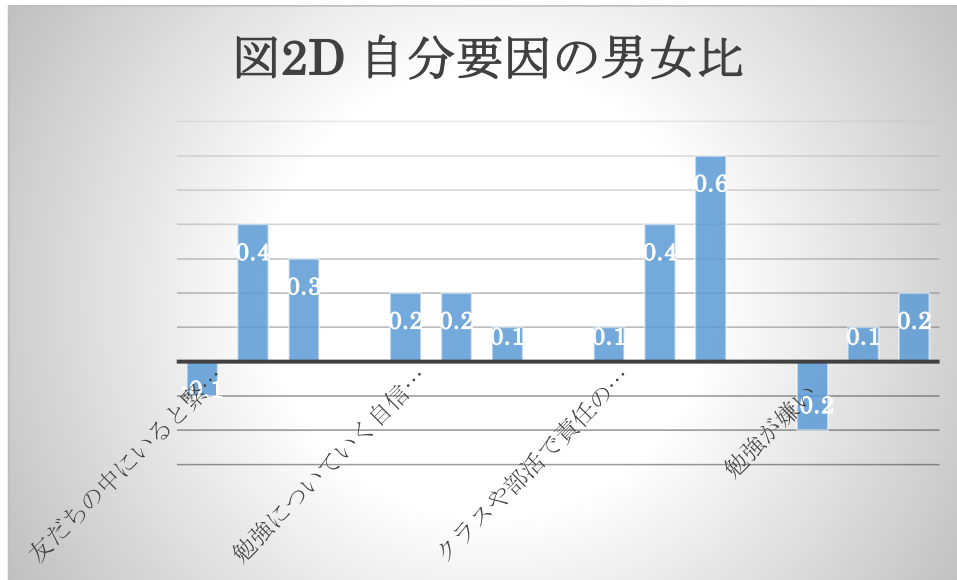
図2C クラスメイト要因の男女比



クラスメイト関係の登校困難要因については、全要因で小中高と校種が上がるにつれて女子が増えています。いじめ、対人緊張、校内暴力、喧騒など要因は異なっても、女子は小中高と登校困難度が増していました。

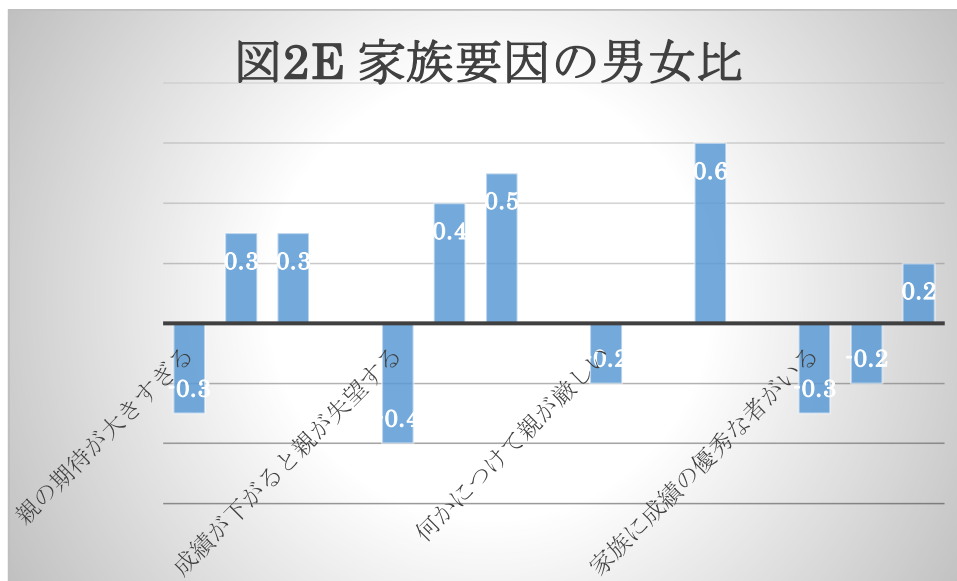


図2D 自分要因の男女比



自分自身については、全般に女子が不満を抱きやすく、殊に中高生になると一層目立ちます。殊に自己評価に関する内容で女子の困難度が高くなり、高校で登校困難が殊に女子で増加する背景に自信喪失や劣等感など、自己評価の低下がより顕著になるのかもしれませんが。女子の場合に、クラスや部活で責任ある立場になることを登校困難の要因として高くなっています。責任ある立場は周囲の評価をうけることであり、自己評価が下がるとこの立場は耐えがたいものになるかもしれません。

図2E 家族要因の男女比



家族関係の登校困難要因は、女子高校生が男子よりも優位になっていました。殊に「成績が下がると親が失望する」「親が厳しい」では女子高校生が顕

著で、親を失望させまいと努力しようと思っても、思うように成績も上がらない自分に失望し、学校へ行くのも苦しく、それが親の厳しさを誘い、さらに登校困難になるという悪循環の構図がうかがわれます。

次に、登校困難要因の校種別頻度調べました。

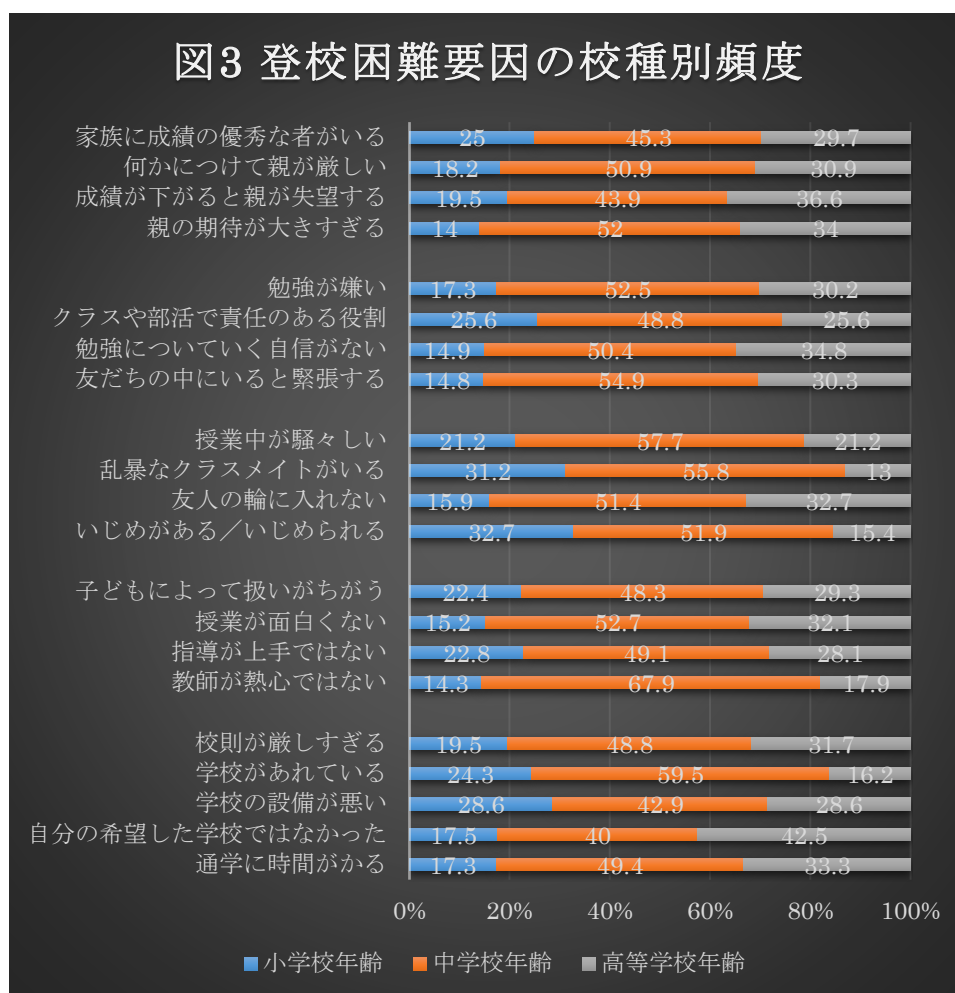


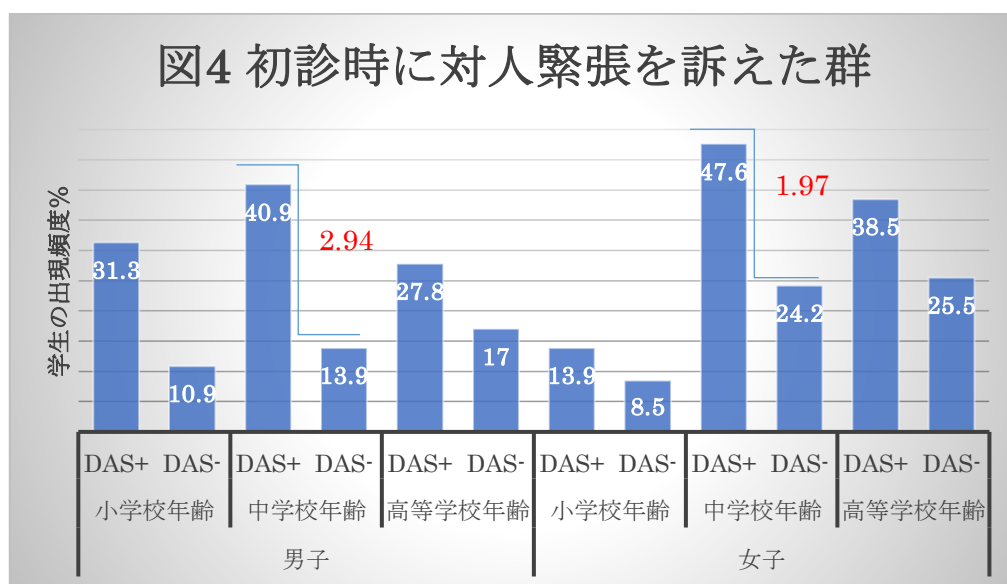
図3は小中高校別に要因頻度を調べました。いずれの要因も中学年齢が最多でした。学校カテゴリーで第1位の要因は、小学校年齢では設備不良、中学校年齢では教室の喧騒、高校年齢では非希望校、でした。教員カテゴリーの第1位は、小学校年齢で指導が上手でない、中学校年齢で不熱心、高校年齢では授業が面白くない、でした。クラスメイトカテゴリーの第1位は、小学校年齢ではいじめ、中学校年齢では授業中が騒々しい、高校年齢では友達の輪に入れない、でした。女性では友達の輪に入れない(対人緊張)が第1位でしたので、高校年齢で女性の登校困難が増加する一つの要因が対人緊張であると思われます。家族カテ

ゴリーの第1位は、小学校年齢では家族に成績の優秀な者がいる、中学校年齢では親の期待が大きすぎる、高校年齢では成績が下がると親が失望する、でした。小学生では年長の同胞と比較され、中学では高校を控えて親の期待が膨らむことが考えられ、高校では大学受験に向けて成績に親も本人も過敏になっている姿がうかがえます。

登校困難要因の中で比較的重要な要因として対人緊張(不安)あるいは対人緊張がみられました。そこで登校困難と対人緊張の関係について分析しました。

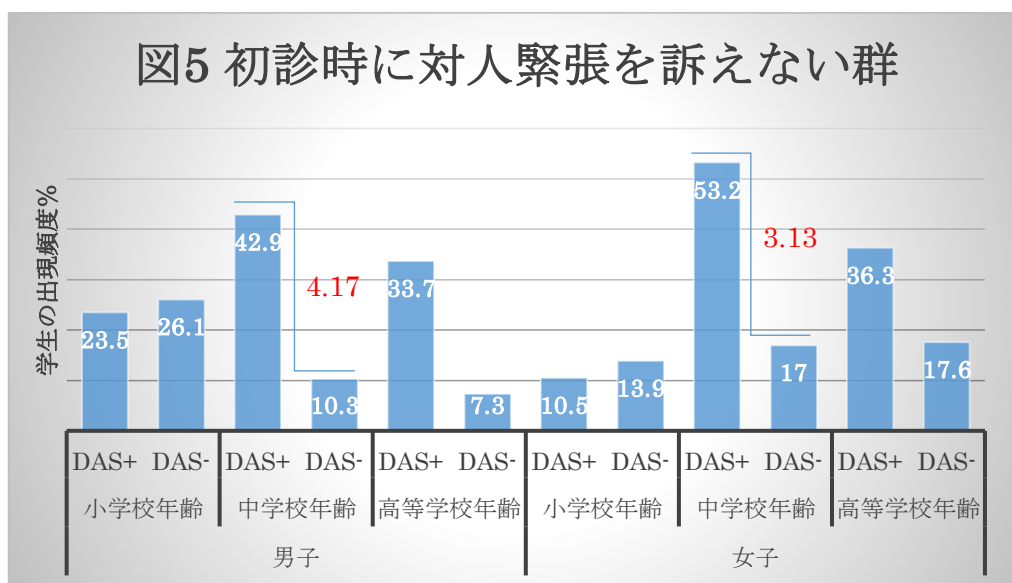
対人緊張を初診時に訴えた子ども達は597名(ラッコリン若年受診者群971名中の61.5%)[ここでは**対人緊張群**と呼んでおきます]でした。対人場面で緊張の強い子ども達は現代では少なくはないと思えますが、対人緊張群はラッコリンを受診した子ども達のため一般人口よりは多くみられていると思います。このうち男子は184名(30.8%)、女子は413名(69.2%)で、圧倒的に女子に多くみられました。一方、初診時に対人緊張を訴えていない子ども達[ここでは**非対人緊張群**と呼んでおきます]は374名で、男子170名(45.5%)、女子204名(54.5%)でした。文献的にも、年間有病率は女性9%、男性7%、生涯有病率は13%以上と言われ、対人緊張障害は決して稀な病態ではありません。また、対人緊張障害の発症年齢の中央値は13歳頃で、3/4が8~13歳で発症していると言われていいます。この年齢は小学校高学年から中学1,2年生にあたり、自我の探求と共に他者の視線や評価を気にし始める年齢でもあります。

図4は男女別・校種別・登校困難別の学生頻度(%)を示しています。



初診時に対人緊張を訴えた学生群で登校困難のある(DAS+)学生頻度は、図4

のように、①小中高の年齢の中では中学校年齢の男女が高く、②中高校年齢では男子よりも女子が高い、という結果でした。



一方、初診時に対人緊張を訴えていない子どもでも、対人緊張を訴えた子ども達の結果(上記①と②)が共通して認められました。対人緊張は登校困難の増悪因子の1つと予想していましたが、実際には対人緊張が DAS+学生頻度を増大させたのは小学校年齢の男子でした。女子では対人緊張を訴える学生の方がむしろ DAS+学生頻度は減少していました。また、中学年齢の男女と高校年齢の男子では対人緊張を訴える学生の方が DAS+学生頻度が低下しており、高校生年齢の女子のみが増加していました。男女差は対人緊張のあるなしに関わらず中学・高等学校で女子優位が明瞭でした。すなわち、中高生年齢では対人緊張による増悪効果は限定的(恐らく登校困難の発火装置として作用するのか)で、むしろ対人緊張以外の要因が登校困難を増強・維持させている可能性があります。一方、女子高校生では対人緊張が DAS+学生頻度を増加させる可能性がありました。この年齢の女子にみられる同族群化傾向が対人緊張を増悪要因として活性化させている可能性が考えられます。ノルウェーの Jo Magne Ingul と Hans M Nordahl (2013) は不安の強い登校困難高校生と不安が強くても登校継続高校生の比較をして、後者は社会不安やパニック障害などに対する抵抗性(レジリエンス)が高いことを見出しています。レジリエンスを低下させる個人的要因として、否定的なパーソナリティ傾向、対人緊張、パニック症状、行動上の問題などがあり、また心理社会的要因として親友の数が少ない、自己健康感が低いことがあげられていましたが、いじめ被害は少なく、学校で敬意をもって扱われていると述べていたという結果でした。図 3 で示したように、対人緊張は中学校年齢で最

大で高校年齢でやや減少するという結果でした。このことから、小学校年齢から中学校年齢へと成長するに伴い対人緊張が減弱した、という可能性は低いと思われま。中高生年齢は対人緊張を自覚しながらも、対人緊張が増悪効果を軽減した理由を考えてみる必要があります。

対人緊張は発達障害、社交不安症や回避性パーソナリティでもよくみられる現象です。最初に一部の子ども達に実施したリーボヴィツ社交不安尺度 Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) またはラッコリン社交不安尺度 Rakkoring Social Anxiety Scale (RSAS) –表2のようにLSASに基づいて通学年齢の子ども用に改変した尺度ですが信頼性や妥当性などの検定はされていません–の結果を検討しました。

表2 ラッコリン社交不安尺度 RSAS(未検定)

不安惹起状況	恐怖感／不安感				回避			
	0:全く感じない 1:少しは感じる 2:はっきりと感じる 3:非常に強く感じる				0:全く回避しない 1:回避する(1/3以下) 2:回避する(1/2程度) 3:回避する(2/3以上)			
1. あまり親しくない友だちの前で電話をかける。	0	1	2	3	0	1	2	3
2. 少人数のグループ活動に参加する。	0	1	2	3	0	1	2	3
3. 教室で多数のクラスメイトと昼食を食べる。	0	1	2	3	0	1	2	3
4. 友人と一緒に飲食店で食事をする。	0	1	2	3	0	1	2	3
5. 校長先生と話をする。	0	1	2	3	0	1	2	3
6. 教壇に立ってクラスの皆に話をする。	0	1	2	3	0	1	2	3
7. 友だちの誕生日会に参加する。	0	1	2	3	0	1	2	3
8. 皆がみているところで勉強する。	0	1	2	3	0	1	2	3
9. 皆のみているところで黒板に字を書く。	0	1	2	3	0	1	2	3
10. よく知らない人に電話する。	0	1	2	3	0	1	2	3
11. よく知らない人と話し合いをする。	0	1	2	3	0	1	2	3
12. 初対面の人と会う。	0	1	2	3	0	1	2	3
13. 学校のトイレで用をたす。	0	1	2	3	0	1	2	3
14. 教室に遅れてはいる。	0	1	2	3	0	1	2	3
15. クラスで皆の前で発言をする。	0	1	2	3	0	1	2	3
16. ホームルームやクラス会で意見を言う。	0	1	2	3	0	1	2	3
17. 試験を受ける。	0	1	2	3	0	1	2	3
18. 友達の意見に反対する。	0	1	2	3	0	1	2	3
19. あまりよく知らない人と目を合わせる。	0	1	2	3	0	1	2	3
20. 人の集まっているところで報告をする。	0	1	2	3	0	1	2	3
21. 一緒に遊ぼうと友だちに声をかける。	0	1	2	3	0	1	2	3
22. 店に品物を返品する。	0	1	2	3	0	1	2	3
23. 友達のお誕生日会の準備を任される。	0	1	2	3	0	1	2	3
24. 強引な入部の誘いを断りつづける。	0	1	2	3	0	1	2	3

以降の記事は、改訂を重ねながら、データ解析の進行に合わせて追記します。

